

高知女子大学看護学会誌創刊に際して

第11期生
南 裕 子*

今年4月高知女子大学は、長年の念願であった看護学部独立と修士課程開設を含む大学全体の改学を果たされました。その年に、高知女子大学看護学会は学会誌を創刊する運びとなりました。これで高知女子大学看護学会は学会としての位置づけを確かなものにするとともに、学会としての発展における新たな段階に入ったと言えると思います。

4月14日に開催された高知女子大学改学式に出席させていただき、池キャンパスの看護学部を見学することができました。最近看護学系のすばらしい大学が全国で次々と開設されていますが、私は母校の新しい校舎をみて深い感動を覚えました。校舎自体の美しさや教育機関としての看護学部の設備にも感動いたしましたが、一番深い感銘を覚えたのは研究機関としての看護学部の施設でした。大学は、教育と研究を2本柱とし、最近社会に開かれたサービス機関としての機能も期待されています。ところで、看護系大学は、長年その教育環境が余りにも貧しかったので、1990年代になって新しい大学が開設され始めた頃には、特に教育機関としての充実に力を入れたものですが、研究機関としての大学としては物足りないものがなきにしもあらずでした。

ところが、このたび開設された母校の看護学部では、研究するための空間がたっぷりと準備されているではありませんか。さすが看護学の教育を行う大学としては日本では一番長い歴史を持つ伝統ある大学だけあると感銘を受けるとともに、母校の先生方の高い識見に感服いたしました。この空間に魂を入れるお仕事が先生方に課されているわけですが、初代学部長となられた山崎美恵子先生のもと、新進気鋭の教授陣を始め若手の研究者による研究がこれから盛んに行われることと信じています。

看護学は、21世紀を目前にして良い意味でも悪い意味でも大きな曲がり角にきていると思います。これだけ大学や大学院の数が増し、研究者の数も急速に増加しているという事は、社会が看護学の発展に期待し、応援してくれているということでもあります、それだけに今度は看護学が社会にどのように貢献できるのかを厳しい目でみられるようになるからです。

ところで、学問が育つということは、良い意味での学派がいくつか発生するということではないかと思います。特に看護学のように人間学や人間科学を基盤に学際的な学問であ

*兵庫県立看護大学学長

る場合には現象に対して視座の異なる接近法が開発されるのが当然であると考えます。大学毎に学会が起こされる傾向があるのは、そういう学派が育っているということではないかと思います。看護系大学を中心とする学会としては最も歴史の長い本学会は、すでに独特の文化を育ててきたと思います。しかし、今までは学会に参加した方々にしか学会の雰囲気伝わらず、特に研究発表の部分ではこの学会の文化が他に伝わらないもどかしさがありました。学会誌の発刊というのは、まさにこの学会で育つ学派における研究を世に問うということであると思います。卒業生の一人として、本学会の発展を心から期待するとともに、会員の一人として微力ながら何ができるのかと心を引き締めています。